



Today's Dialogue

特別対談

青柳志郎

書道家
日本北陸書道院理事長

鈴木良之

株式会社インテック
代表取締役 副社長執行役員

究極は「愛」—— 書も、ITも人の幸せのためにある

数千年の歴史を持つ「書」の世界——。ITによる情報化社会が発達した今日もなお、手書きの書は人の心を打ち、感動を引き起こします。そうした書の力はどこから生まれるのでしょうか。インテックの鈴木良之が、日本を代表する書道家で、インテック50年史『50年のあゆみ』の題字を揮毫いただいた青柳志郎氏と語り合い、それぞれの“道”についての想いを交わします。



生きるための選択

鈴木：本日は、先生のアトリエ（日本北陸書道院書道研修所：白川郷）にまでおしにかけてしまい恐縮です。先日は、弊社50年史の題字を揮毫いただき、ありがとうございました。先生には、弊社15年史の題字も揮毫いただきましたが、連続してお力添えを頂戴し、心より感謝しております。

青柳氏（以下、敬称略）：こちらこそ、御社にとって記念すべき歴史書の題字を揮毫させていただいて光栄です。下手な字で、迷惑じゃなかったですか。もしや、「もっと上手く書け」と言いに来られたのかな（笑）。

鈴木：そんなご冗談を（笑）。50年史を編纂するなかで、先生の書の力に改めて衝撃を受けまして、ぜひお話を伺いたいと、ご迷惑を顧みずお邪魔した次第です。そこで早速、お聞きしたいのですが、先生が書の道に入られ

たきっかけは何だったのでしょうか。

青柳：まあ、結局のところ家の環境です。父が書道の先生で、富山県の師範学校で教えていたこともあり、私は幼少のころから墨の香りの中で過ごし、自然と書に親しんでいましたから。

鈴木：ほかの道に進まれようとは考えなかったのですか。

青柳：ええ、筆で字を書くことが好きでしたし、鈴木さんと違って“機械”が大の苦手ですからね（笑）。それに、小学校高学年から中学校までは太平洋戦争のただなか。学校に行っても軍事教練ばかりで、勉強らしい勉強をした記憶もありません。となればもう、得意な書で身を立てるしかなく、いわば、生きるための選択ですよ（笑）。

「愛」が頂点にある

鈴木：とはいえ、先生のここまでのご高名の



原点が「好きなこと」というのは、うらやましい限りです。日展入選も20代という驚くべきスピードだったとお聞きしています。

青柳：そう、24歳のころです。当時における日本最年少の入選で、新聞でも報道されました。ただ、それだけで書道家としての道が開けたわけではなく、若いころは書が売れず、「自分には才能がないんじゃないか」と、ずいぶん悩んだものです。死にたいと思ったことすらある。

もっとも、芸術の世界に限らず、何事においても道を究めようとした場合には、相当の苦勞や努力が必要でしょう。御社にしても、何の苦勞もなく今日があるわけではないはずです。

鈴木：ご推察のとおり、50余年の歴史の中には、様々な苦難を乗り越えてきた過去があります。しかも、我々が身を置くITの世界は変化が激しく、ともすれば、自分たちが何をすべきかすら見失いがちになります。そんな中

で、大切にしてきたのが「不易流行」という考え方です。いつまでも変わらないITの本質を忘れずに、変化を柔軟に取り入れていくということです。

青柳：御社が考えるITの本質とは何なのか。

鈴木：うまく表現できないのですが、「ITは人のために存在する」ということです。ですから、我々も技術に精通していればいいというわけではありません。むしろ大切なのは、習得した技術を使って人の仕事や暮らしを快適にし喜んでいただくことで、自分たちも充足感が得られ、幸せになれると考えています。

青柳：すばらしい。その考え方は、書道芸術にも通じるものです。書道芸術も、最後に行き着くのは、人に対する「愛」だと思うんです。ITで人の幸せを追求するのと同じように、芸術もまた、「愛」が頂点にあり、そのいただきを目指していると言えるのです。

人となりのすべてが投影される

鈴木：ここで改めて、先生の考える書の本質についてお聞きしたいのですが。

青柳：私は、書の本質を「観念であって、実在ではない」と結論づけています。簡単に言えば、書とは、「誰が書いたか」「何を書いたか」「どう表現したか」の3つが絡み合って成立するもので、造形的な美しさだけではかたづけられない問題があるということです。例えば、字の表現力は技術の鍛錬によって高められますが、その技術を使って何を書くかは、どれだけ言葉に関する知識・教養があるかによって違ってきます。また、どんな人格、あ

インテック50年史の題字

50年のあゆみ

るいは背景を持った人が、その言葉を書いたかによっても書は異なってくるのです。

さらに言うと、「上手い字」と「いい字」もまた違う。「下手な字」でも「いい字」であったり、その逆であったりするわけです。

鈴木：なるほど、非常に奥深いですね。書には、技術だけではなく、知識・知性・感性などを含めた人となりのすべてが投影されると。

青柳：もちろん技術も大切ですが、それだけでは、例えば、格調の高い字は書けません。様々な芸術・学問に触れ、知性・感性に磨きをかける必要があるのです。

それともう一つ、格調の高い字が書けるかどうかは、暮らし方によるところも大きいと感じています。実際、平安貴族の字を見ると、私を含めた現代人ではとても再現できないような格調の高さがあります。それはおそらく、彼らのおおらかな暮らしの中で、物事をじっくりととらえ、観察し、知性・感性に磨きをかけた結果だと思うのです。

鈴木：逆に言えば、日々時間に追われ、心にゆとりの持てない現代人には、格調の高い字を書くための知性・感性を研ぎ澄ますことはなかなか難しいということですね。

青柳：そう感じます。その意味で、大都市よりも、富山県のような地方のほうが芸術・文化が育みやすいとも言えます。刺激は少ないですが、地方は都会よりも緩やかに時間が流れますし、心豊かに暮らせますから。



コンピュータでは 伝え切れないもの

青柳：それにしても、近年のコンピュータの発達ぶりはすごいですね。そんなハイテク文明の中心にいる鈴木さんから見て、書の文化はどう映っていますか。

鈴木：確かに、コンピュータの進化は加速度的ですが、限界もあります。例えば、今日ではメール等で簡単にメッセージをやり取りできますが、今のコンピュータの文字表現では、人の感情や想いを間接的には伝えられても、直接的には伝えられないと思っています。

一方で、手書きの書は、人の感情の起伏も含めて、様々なことを直接的に伝えてくれます。実際、先生に再び揮毫いただいた題字は、我々の50年が様々な努力・想いの積み重ねであることを物語ってくれていると強く感じました。それは、どんなコンピュータを使っても表現できるものではありません。しかも、15年史の題字を揮毫された先生に再び50年史の題字も揮毫していただいたことで、時の重みというものも併せて伝えることができたと考えています。

青柳：とはいえ、コンピュータやメールもやはり便利で、こうした利便性は人の暮らしにとってとても大切です。ですからこれからも、机に向かい、想いを込めて文字を書く文化と、ハイテク文明が共存し、人の暮らしをより豊かにすることを望んでいます。



道は果てしなく

鈴木：先生は、日中国交が正常化される以前から、書の源流である中国に赴き、研鑽を積まれたとお聞きしています。また、中国のみならず、欧州・北南米など、多くの国々で個展・デモンストレーションを展開し、書の文化の普及にも尽くしてこられました。そして今もなお、創作に意欲的に取り組まれておられます。そうした情熱はどこからくるのでしょうか。

青柳：一つは、自分が生涯をかけた書の文化をもっと普及させたいという想いからです。また、書道というのは魔性のような力があり、いったん引き込まれると、もっといい字が書きたい、いい作品を作りたいという欲望から抜け出せなくなるんです。



しかも、死ぬまで思うような字が書けないのが、この世界です。もちろん、つとつと、自分で納得するまで幾度も字を書き、書を完成させ、雅印を押しはします。ところが、2年ほどのちにその作品を見返すと、必ず何か足りないと感じてしまう。要は、芸術には終わりはなく、生涯、学びと研鑽を続けなければならないということです。

鈴木：芸術とは異質な世界ですが、終わりが無いというのは、ITの仕事も同じです。変化が激しいこの世界では、立ち止まっている余裕は一切なく、常に新しい技術を取り入れ、先を見通しながら、自分たちを高めていかなければなりません。

青柳：そんな御社に向けて、「吞舟之魚 不游枝流（どんしゅう うお しりゅう およ 吞舟の魚は枝流に游がず）」という言葉を書にしてお送りしたいと思います。これは、中国・戦国時代の思想家、列子の言葉で、「舟を呑み込むような大魚は、支流にはすまない」——つまりは、「志高き大人物は、些細な事にはかかわらない」といった意味の言葉です。御社はまさに日本のIT業界の中心にある大魚ですから、本流をこれからも突き進んでいただきたい。

鈴木：本当に感激です。この言葉を先生からの励ましととらえ、これからもITで人と社会に貢献できるよう懸命の努力を続けます。本日はありがとうございました。

青柳：こちらこそ。

Profile

青柳 志郎（あおやぎ しろう）

2012年の郵便年賀切手で干支文字を揮毫するなど、日本を代表する書道家。1957年に日本最年少で日展初入選。以降、日展入賞は8回を数え、1982年には作品「赴」が毎日書道展の会員賞（グランプリ）に輝く。日中国交正常化以前から書の研鑽を目的に中国に赴き、現地書道大家との親交を深め、海外での個展・デモンストレーションも中国の55回を最多に、欧州・北南米など多国にわたる。1966年から、父・青柳石城が創設した日本北陸書道院の理事長に就任。ほか、上海復旦大学学術教授、上海中国画院名誉会員、毎日書道展審査委員・評議員などの役職にある。1986年に富山県文化功労賞受賞、1998年に地域文化功労者文部大臣表彰を受ける。